

●令和3年度第1回河川審議会（令和3年11月11日）での主な意見

	発言内容	意見のポイント
治水	中上流部は水田や農地の土地利用から「保水・遊水機能を有している」と整理しているが、 <u>上流部だけでなく、中流部や下流部にも浸水が出ているのではないか。</u>	<ul style="list-style-type: none"> <li>流域全体で浸水被害の軽減を図るためには、<u>流域内でもともと有していた保水遊水機能の保全</u>が重要である。</li> <li>津波対策においては、静岡市と連携して、<u>河口部周辺の景観や観光客への配慮</u>も必要。</li> <li>安全・安心な地域づくりのためには、小坂川の整備はもとより、水害経験のない住民も含めた <u>地域全体での防災意識の向上を図る</u> ことが必要。</li> </ul>
	上流域の水田や果樹園等の環境は、現状の治水、流出抑制に貢献していると思う。今後の高齢化を含めた社会情勢の変化に伴う <u>上流域の土地利用の変化</u> が、小坂川ではかなり重要になるのではないか。	
	流域治水を考えると、田んぼダムの取り組みが必要となるかもしれないが、水田に大きく貯留すると農業被害が出るため、農業部門と連携をして進めて頂きたい。	
	<u>林業従業者が高齢化し衰退</u> すると、 <u>森林が荒廃し上流部からの河川被害が増加</u> すると思われる。	
	高齢化や農業者減少により荒れている農地が増えているが、規模の拡大や農地の集積・集約化により農地を守る取組をしている。小坂川は規模が小さいため、大きな農地経営をする方は少ないと思うが、 <u>地域で守っていく取組は、農業関係者で協力して進める必要</u> がある。	
	用宗漁港周辺のにぎわいを考えると、 <u>小坂川の津波対策では、周辺景観への配慮が必要</u> となるかもしれない。静岡市の意向も踏まえて検討する必要がある。	
	『自分たちの地域は自分たちで守る』といった意識が家がどんどん整備される地区では希薄になりがちである。安全な川であることは基本だが、安全を維持するには地域のつながりが大切であることを意識してほしい。	
住民アンケート結果を見ると、 <u>風水害に対する危機感がやや低い</u> ように感じる。住宅密集地に狭い河川が流れていることに対して、もう少し危機感を持ってもらいたい。		
利水	小坂川は両岸コンクリート護岸で、川に下りる場所がない。河口部は仕方ないが、中流域は河川敷が非常に狭いので、治水を最優先にしないとイケないと思うが、平時には河川敷に下りられるように、親水的な配慮があれば、様々な方が川に親しむことができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>現状では、水辺に近づける施設がない区間もあるが、今後の川づくりにおいては、<u>少子高齢化や社会構造の変化など、地域の実情に応じた河川整備を進めていく</u>ことが重要である。</li> <li>水利権は設定されていないが、流域内では安倍川に由来する伏流水の利用が行われており、<u>地下水や伏流水についての配慮は必要</u>。</li> </ul>
	親水護岸については、スロープをつけるにも需要のあるところを探る必要がある。散策を中心とした利用で、親水性を必要としない地域もあり、親水の魅力を伝える啓発活動から始めるのか、ニーズがある他の地域に整備するのか、戦略的に実施する必要がある、今後はそのような調査もできると良い。	
	小坂川では水利用はないということだが、大規模な製紙工場もあり、 <u>地下水や伏流水の利用について配慮は必要</u> だと思われる。「留意する」といった記述はあってもいいのではないか。	
	地下水、伏流水については、上流域を含めて流域一貫でより深く考えていくべき問題である。	
環境	ウナギやボラなど川へ遡上する回遊性の魚種も確認されるので、 <u>海と川との連続性を確保</u> するよう配慮する必要がある。	<ul style="list-style-type: none"> <li>下流部は感潮区間であり、特徴的な自然環境や汽水域の生態系が形成されているため、<u>自然環境の保全や、海と川との連続性への配慮</u>が必要である。</li> <li>中流部では、周辺環境の水田とつながりが強い生物や植物が生息しており、河川改修の際には、<u>生物・植物の生息・生育環境の保全や周辺環境との連続性に配慮</u>することが重要である。</li> <li>景観については、上流の集落から中流の水田等、農地、下流の用宗漁港という連続した景観の形成に向け、<u>静岡市のまちづくりと連携して取り組む</u>ことが重要である。</li> </ul>
	感潮区間では <u>干潟に生息するチワラスゴ属が見られるなど特徴的な自然環境</u> があるため、河川整備に当たっては配慮する必要がある。	
	中流域では、エビモやミクリの仲間やミナミメダカが生息しているが、元の繁殖環境は水田地域であり、一部が流出して河川に定着したのではないか。除草剤の影響から水田での生息環境がすでに無くなっている状態であり、河床掘削により完全に絶滅する可能性もある。治水が最優先になるのは分かるが、底生環境を含めた周辺環境をよく見て整備する必要がある。	
	中流部は河床に生物が残っており浚渫を行う際には生息環境を保全しながら整備できるかがポイントになる。	
	河川環境に関する水系の特徴については、『 <u>干潟</u> 』や『 <u>湧水</u> 』といった語句を用いて小坂川の特徴をより具体的に記述したほうがよいのではないか。	
	景観については、上流の集落から農地や水田、用宗漁港という連続した景観にプラスして生物多様性を考慮した整備が適切であり、生息する生物や植物を体感しながら移動できるように、資源を整理し、整備につなげてほしい。	
	景観計画では建物を中心となるが、河川は非常に重要であり、 <u>周辺と一体となって整備を行う必要</u> があり、静岡市と連携して、住民が積極的に参加する仕組みができると良い。	
住民との関わり	用宗は古くから人が居住する魅力ある地域であるが、用宗漁港周辺の開発が進み、若い世代の流入や観光客が増えている。雨が多い地域性も考慮し、 <u>山から海まで全体を意識して河川計画を検討</u> してほしい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>上流域では地域の住民による河川清掃や除草などの取り組みが行われている一方、住民の高齢化による地域活動の衰退が懸念される。下流域では、用宗漁港周辺の開発が進み、若い世代の流入や観光客が増えている。<u>上流・中流・下流でそれぞれ異なる地域の要請を適切に捉え、河川整備に反映させる</u>ことが必要である。</li> </ul>
	<u>上流、中流、下流で資源の特徴が明確</u> な場所であり、観光として利用するか、住民の意識を川に向けて流域治水に結びつけるのかなど、方針に沿って3つの地域の特徴をどのように出すのか、連続性をどのようにつなげるのかという整理が必要である。	
	小坂川中上流域では、現在の小坂川と地域の関わりを大事にしつつ、地元住民に負担がかからない川づくりが大事だと思う。	
	地域住民が行なっている草刈り作業も、技術や経験がないとできない。 <u>今後の高齢化などによる取り組みの衰退が心配</u> である。	
川づくりにおける地域住民との連携を進めるためには、 <u>市町が地域づくりをどれだけ積極的に取り組むかが重要</u> である。		